

「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学大学院・文学研究科1年 大木香菜江

東アジアジュニアワークショップは、8月14日から5日間開催された。台湾大学、ソウル国立大学、京都大学の3校の学生が、今年は韓国ソウルに集った。毎年開催されるこのワークショップは今回で9回目を迎える。最初の3日間はソウル国立大学の学生がコーディネートしたフィールドワーク、残りの2日間は参加者による研究報告である。

韓国社会では、ソーシャルムーブメントが大変盛んである。若者の政治関心も強く、社会運動への参加にも積極的である。韓国の学生たちがコーディネートしたという今回のフィールドワークの内容も社会運動に焦点を充てており、学生一人一人が社会に声を挙げる姿勢が印象的であった。

光化門前広場の「セウォル号沈没事故慰霊碑」を訪れると、その周辺で常設のデモが行われていた。300人近い死者の多くは、修学旅行中の高校生であり、韓国社会に大きなショックを与えた。広場には、犠牲者に祈りを捧げる場も設けている。犠牲者一人一人の遺影を前にすると、残された我々への責任を強く感じた。事故を風化させるのではなく、光化門広場という韓国社会の中心地で主張し続けることで、この悲劇への応答責任を果たそうとしているように感じられた。

日本大使館前の「慰安婦像」の隣では、「水曜デモ」が開催されていた。日本人としてこの場を訪れることに若干抵抗があった。しかし、日本のメディアで反日感情の象徴として取り上げられる「慰安婦像」は、韓国では「平和像」として市民から親しまれている。「平和像」にはスカーフが巻かれていたり、裸足の足の横には、靴が置かれていたりする。献花はもちろん、お菓子や飲み物も並べられており、中には日本からの贈り物であろうか、日本語で書かれた包みも見られる。「平和像」周辺は、激しい怒りを表現する場ではなく、むしろ安らかな空気の流れる場であったことが意外であった。日韓両国の利害関係以上に、二度と戦争による悲劇を繰り返してはいけないという願いを発信し続けるのが、「平和像」であると、活動に参加する大学生は語ってくれた。

残りの2日間は、参加者によるテーマごとのプレゼンテーションが行われた。どのプレゼンテーションも各国の実情を社会学的な知見から切り込んだ分析がなされており、大変興味深いものであった。また、国際発表を経験する中で、自分の研究に対する知見をより広い視座で捉えられるようになったことは、大きな成果であるように思う。

自身は台湾、韓国、日本とヨーロッパ諸国の家族主義を比較分析し、発表した。実際にそれらの国に住む学生達を前にこうした研究発表を行うことに戸惑いもあった。自分の出した結論が、彼らの実感とずれていたらどうしようと、不安にも思っていた。しかし、発表後には意外にも台湾、韓国の学生や先生方から、研究を労う言葉をかけていただくことができた。また、国内では得ることができなかった方向からの指摘を受けることができたのも、国際発表に参加した意味があったように思う。また、発表以外の時間でも、何人もの学生達に自分の研究に対する意見や、各国の実情を聞く機会を得ることができた。

今回のこうした経験を今後の自分の研究の糧とし、今後に繋げられたらと考えている。